

野生動物との共生を 目指して

生活者として自然の中で 生きることを考える

猟師でも農家でもない私に
できることは…

昨年はニホンツキノワグマ(以下「クマ」)がたたくさん街に出没し、人間界は騒然となりました。捕獲に奔走する警察や自治体職員の方：地元民の安全確保のために駆除するのか？絶滅危機にあるクマを守るのか？いろいろな意見が交錯します。クマは普段はおとなしいのですが、身に危険がせまっていると感じればアタックすることもあり、私も怖い思いをしたことがあります。でもこれが自然であり、決して人間がかなうものではない畏敬の念を感じます。

野生動物と共生するということは、保護するというより、多くは戦い、立ち向かってきた歴史があります。現実には野生動物による農作物や生活被害が多発しており、野生動物とヒトの摩擦が日々発生しています。昔(数十年前)はよかつたとか、野生動物はぜんぶ殺してほしいとか、もうそんな他人まかせで解決できることではなくなつて、民家のすぐ横の藪には今日もイノシシやニホンザルたちがやってきているのです。

さて私、猟師でも農家でもないし、難しいことは何もできないので、日常生活の中で市民ができることは無いのかと考えたのが、活動の始まりです。

た。何ができるのか…。

「獣害」から 逃げられない地域

「獣害」という物騒で面倒なことからは、避けて通りたいこのご時世に、いやがおうでも向き合わなければならぬ地域があります。山奥の限界集落と呼ばれる過疎地域や高齢化の進んだ地域ばかりでなく、山の近くに街はどこでも野生動物との付き合いがあります。富士北麓でも、田んぼや畑にニホンザルやイノシシ、ニホンジカ、タヌキなどの野生動物が現れ、丹精込めて作った作物が食べられて捨てられ



藤園 まり

NPO法人獣害対策支援センター事務局

【ふじその まり】岐阜県生まれ。岐阜大学大学院農学科卒業。研究テーマは「子どもの遊び空間としての雑木林の意義」。カヌーで川下りをしたり、ジャズライブをしたり、いろいろ遊ぶ。造園会社にて庭の設計などに携わったのち、山梨へ移住。現在、獣害対策以外に、子どもの野外キャンプや、自然体験活動にも携わっている。



エサを求めてサルが来る



ています。その獣害対策として一役買っていたのが狩猟でしたが、年々山に入る猟師さんが減り、駆除や捕獲ばかりに頼ることが難しくなっています。かつては里山と呼ばれる手入れの行きとどいた林が、獣とヒトとの緩衝帯となっていたと思われませんが、現在の生活の中で薪炭などの利用は激減し、里山は必要とされなくなってしまうています。

私が自分の住んでいる市の農地を見て回り、地元の方とお話をさせてもらうと、森の中、山の上まで畑にしていた莫大な労力と苦勞に驚かされるばかりです。

りです。しかし現在は農作業をする人がだんだん山を降り、かつては段々畑だったのに、すっかりツタや木で覆われているところはさらにあります。

藪になっていくことが悪いわけではなく、獣とヒトとが何となく住み分けてきた境界線が無くなってきたことが問題なのです。藪は獣の棲みかとなり、すぐ横にある田畑で直に対峙する機会が増えてしまいました。でも昔はどうであれ、私たちは今を生きているわけで、自分たちで何かどうにかしなければなりません。私が銃を持つ自信は無いし、いったいどこから手を付ければよいのか…。

県外出身者ですが…

私は富士北麓に住み始めて七年目で、地元の方からすればエイリアンです。活動しようと思いはじめたのが四年前ですので、まだ地域の地理も分からず友達も少ない時でした。とりあえず県の野生動物研究者と連携を取りながら、何が効果的で市民にできる活動なのか暗中模索の日々が続きました。まず仲間を集めようと思い、いろいろな聞きかじりの知識を並べ危機感をあおってみました。が、(私は元来のんびり屋なので、そんな気持ちは伝わらなかつ

たかも…)誰も具体的に動けるイメージがつかめなかったようです。

でも「事件は現場で起きているんだ！」というのを思い出し、御託を並べる前にまずサルを追払うという行動を続けました。モデルエアガンという玩具とはいえ、見た目は本物そっくりの武器を持って、田畑を歩き回る女！は、とても変わった人だと思われていたことでしょう。

そのうちにだんだん近所の方と顔見知りになり、何か地域のためになりそうなことをやってくれている人がいることが知られていきました。でも、「やってくれる」ということになってしまふと、自分も動くことについては結び付かないようでした。雨の日も風の日も、サルが出ている情報があれば現場に出かけて追払いをしている私自身の中には、地域の人のために貢献しているという自負が大きかったように思います。ただ単に、やり始めたからには頑張ってもやり抜かねば、という勝手な使命感もありました。

組織より先に私の体が崩壊

その頃、任意団体として活動していましたが、あいまいだった運営方法について、いろいろな意見が出てきまし

桑の実イベントの様子。
ちびっ子たちも初めて見る桑の実に興味津々



た。私は事務局になったとはいえ組織をまとめる知識も経験も無く、個々の事情を考えていると、どの人に何をどう頼んだらよいのか、さっぱり分からなかったのです。しかも活動内容は試行錯誤で、道具も資金も人脈も無く、組織が崩壊する前に、自分の体が崩壊してしまいました。

でも、この苦い経験がセンターの方向性を決めて行くことになったのです。

もともと私はどちらかと言えば、他人の言うことをよく聞くイイ子でした（本人いわく）。それゆえに声高の強い意見に流され、何が正しくて平等で公平な方法なのか、答えどころか問題すらよく理解できず、自分を見失いました。でもいろんな壁が壊され、結局やれるようにしかやれないし、私は小さな一歩ずつしか進めないのだからということが分かりました。

みんなをまとめる努力も体裁を整えることもやめ、それぞれの時間で、それぞれに持つ器量でしかできないなあと割り切りました。センターの運営をうまくやることよりも、活動の本質的なところを固め、地に足のついた活動を少しずつ進めることにしたのです。

ここで気付いたことは、私は将来の大きな夢に向かって進むタイプではなく、日々の暮らしを充実させていくことの方が向いているタイプだということでした。良くも悪くも、今頃になってようやく自分の性格が把握できたことで、会の運営方法に少し道が見えてきました。

その頃から活動を理解して、協力してくださる方々の顔が見えてきました。直接的な参加だけでなく、遠くからアドバイスしてくださったり、人を紹介してもらったり、助成金を頂いたりしてやり繰りしているうちに、センター

のカラーが付いてきました。自分がどうこうしてできるものではなく、何となく形になってきたのは、地方公務員の方のお力添えも大きな要因でした。普段の活動に対する理解や共同作業、情報交換だけでなく、任意団体からNPO法人に登記するまでの、私にとっては他言語に近い書類の作成などを助けて頂きました。

また人とのつながりという面では、他のNPO団体⇨人材の宝庫からのお知恵を拝借し、たいへん感謝しています。今までの「頑張って活動をしているんだ！」という気負いがだんだん無くなり、温かい手と心意気を差し伸べてもらい、こうすればいいんだと先が見えるようになりました。様々な考えの人にめぐりめぐって助けられ、設立当初の悩みや不安が軽減されていったのです。

「おいしい」ことが 持続の秘訣!?

このように運営方法や仲間との連携は無理の無い形へと変わっていきましたが、実際の活動自体はほとんど変わっていません。桑の実を採ってスイーツを作って食べたり、柿の実で柿渋を作って染め物をしたり、野山に出か



柿渋イベントの様子

けて行って体を動かし、自然の恵みを頂くと、「食べてばかりじゃん!!」という企画をしています。でも、しっかり成果に結び付く、何ともおいしい活動なのです。

なぜこんな対策が獣害対策につながるのかという点ですが、野生動物の視点に立つて考えれば、街のほうから山よりも餌にボリュームがあり、安全で労力をかけなくても餌が採れるとなる

と、人間エリアに降りてくるのは当然です。それを阻止する基本的な方法として「一・野生動物と住むエリアを分ける」「二・野生動物を人間の住むエリアに誘因しない」ことが有効です。具体的には、餌となる生ゴミや農作物残渣、管理できない果物を残さないために、特に誘因効果の高い桑や柿の撤去を、イベント形式で行っています。

野生動物が生きていくためには、餌を獲得することが一番重要な行動です。では、人間側はその餌場になっている空間をどうしたいのか？ 言葉では通じない相手です。こちらがどう動くかを動物はよく見えています。その空間が安全なのか？ 餌の状態はどんな具合なのか？ 言葉や情報でやりとりすることが多くなった今日、態度で示すというのはヒトが苦手になった分野なのかもしれません。行動のみが手段なのです。

私が個人的に思う究極の獣害対策は、ヒトが動物との境界線あたりで「騒ぐ」こと、だと思っています。現に、柿の枝を切ったり、桑の実を落としたりする時には、子どもも大人もキャーキャー言っていて、ちょっとしたお祭り騒ぎになっています。「サルがいるから家に入っていないさい」ではなくて、みんなで騒げば怖くない作戦でいくのです。

みんなが何か仕事をしている場合は、子どもたちの遊び場であり、また核家族が進み普段は触れ合うことの少ないおじいさんやおばあさん世代の知恵や工夫を教えてもらったり、たまには叱られたり褒められたりと、とっても温かい雰囲気になります。また、活動の参加者だけでなく、だいたい近所の野次馬さんが「何事か？」と集まりまです。そこで活動の内容を説明したり、情報をもらったりする貴重な地元との交流の時間も生まれるのです。

そもそも、なぜそんなに野生動物の餌となるごちそうが残っているのか？ 昔は獣害が無かったのか？ 野生動物と人の付き合いはどうだったのか？ いろいろ興味本位で調べていくと、歴史のこと、街づくりのこと、食べ物のこと、信仰のことなど、現代につながる面白い事実が次々と出てきます。そこで私だけでなく、みなさんと楽しんでもらおうと獣害に関する歴史を紐解く企画も考えているのですが、当たりもハズレもある中で、思わぬ方との出会いにびっくりすることもあります。

例えば、「猪垣ツアー」では、江戸時代に作られた、イノシシやシカ除けの土塁跡を見学に行ったのですが、遠方の環境設計の方がいらっしやっつて、他分野だと思っていたらこんなところまでつながっていたんだと知ること



放置された柿は「柿採り隊」が持ち主に代わって収穫

ります。また、〇〇名人を紹介してくださったりして、すぐ隣でこんな面白いことをやっていたんだ、というような発見もたくさんあります。やや学術的に偏る場合もありますが、必ず体感して楽しいとか、知的好奇心をくすぐるようなイベントになるように工夫をしています。

ここまでくると「本当に獣害対策なの？」という疑問を持たれるかもしれませんが、山で騒ぐことが私たちの基本です！

活動の原動力は？

野生動物との付き合いを考える根本には「私たちがどう生きていきたいのか？」という普段見失いがちな、たいへんシンプルな問題を突き付けられている気がします。多様な生き物の棲む自然とどう折り合いをつけていくのか、それとも撤退していくのか等…。

表面的には、野生動物との境界線である山と里の空間をどうしていくのか（例えば資源としての利用や景観整備など）というところが問題になっています。しかし、その計画段階から検討すべき点を挙げていけば、市や町の予算や政策だけでなく、土地所有者の意向はもちろん労力や資金、人間関係までもろもろが複雑に絡み合っています：手を付けようとすればカオスです。でも、結局最後にたどり着くところは、ヒトがどう生きていきたいのかということだろうと思うのです。

生活を設計していく上で、個人のお金や時間の使い方を考える以外にも、ヒトという生物としての裸な立場を見ると、山や動物といった自然環境とのかわりは忘れていても潜在的に離れられない関係で、間接的にも直接的な影響があるのだと思います。それが暮らしを豊かにする場合も苦痛になる

場合もあるのですが、そこをどういう価値観で捉えていくのかというところで、人生がずいぶん変わるような気がします。私もこれから歳を重ねるごとにどう変わっていくのか楽しみなので、す。

ふと、たまに振り返ってみると、私は体力もお金も無いのに、なぜこんな大変な世界に足を踏み入れてしまったのか、不思議に思うことがあります。ただ、幼少の頃に山で遊んでいた記憶と、大学で雑木林の手入れをする市民活動に参加していたという過去の影響は大きいのだろうと思います。

そこで出会った人たちとその何となくの流れの中で、何かをやり遂げたいということより、やっていたいという進行形、まさに今息づいている日常の中で、自然の命と温かい人の気持ちに浸っていたいという気持ちなのかもしれません。日々思うことは、野山でフラフラ歩き、植物やキノコや動物たちに出会い、刻々と変わる風景の中でいちいち感動していることが、原動力のような気がします。大自然の厳しくも美しい息吹を感じながら、小さな一歩を踏み出して、今日も豊かな日が過ごせますように…。